



Title	Internal Working Models 研究の展望
Author(s)	戸田, 弘二
Citation	北海道大學教育學部紀要, 55, 133-143
Issue Date	1991-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29358
Type	departmental bulletin paper
File Information	55_P133-143.pdf



Internal Working Models 研究の展望

戸 田 弘 二

Perspectives in the Research of the Internal Working Models

Kohji TODA

1. Internal Working Models の概要

Internal Working Models (以下、IWM と略す) とは、愛着対象との持続的な相互交渉を通して人の内部に形成される愛着対象及び自己に関する心的表象 (mental representation) である。Bowlby (1969/1973) によれば、各個人はこれらのモデルに助けられて現実の出来事を知覚し、未来を予測し、自分の計画を作成するという。IWM は Bowlby の attachment 理論の中でも、特に Personality 形成に関わる議論の中核的な概念であるが、長い間特に注目されずにきたため一般にはあまり知られていない。そこで、最初に Bowlby の著述を基に IWM についての概要を述べることにする。

Bowlby (1973) によれば、愛着対象に関する IWM において重要な点は、“愛着対象が、支援や保護の求めに対して応じてくれる種類の人であるかどうか” についてのその人の判断にある。一方、自己に関する IWM において重要な点は、“自分が他者から、特に愛着対象から受容され、援助され得る種類の人物であるかどうか” についてのその人の判断にある。理論的には2つのモデルは独立であるが、実際には相互に補いあい強めあいながら発達する。子どもは安全感 (felt security) を設定目標 (set-goal) として愛着対象との間で持続的な相互交渉を行い、この関係の中で愛着対象の有効性 (availability; 近づき得ると同時に潜在的な応答性を持つこと) についての期待を愛着対象に関する IWM に組み込んで行く。同時に、これを補完するような形で自己に関する IWM が構築される。やがて、これらのモデルは意識的にあるいは無意識的に新しい状況や関係の中でも象徴的に機能し、より一般性をもった関係性のモデルとして個人の行動の組織化に寄与することになる。例えば、ストレスフルな状況にある子どものシグナルに対して愛着対象が大体において敏感で、適切な応答を示してくれるならば、子どもは愛着対象に対して「自分を愛し、適切な支援を与えてくれる存在」としての IWM を形成する。それとともに、「自分は愛着対象から愛され、援助される価値のある存在」としての自己に関する IWM を形成し、より困難な事態でも、愛着対象からの援助を積極的に活用しながら事態に取り組むという対処方略を組織化することになる。更に、このような対処方略は新しい対人関係の中でも適用され、積極的に他者の援助を求め活用することでネガティブな感情を制御し、事態に対処するという一貫した行動の組織化がなされることになる。一方、常に distress のシグナルを拒絶されたり軽蔑され続けた子どもは愛着対象に対して「拒否する存在」としての表象を形成し、愛着対象に有効性を期待することができないことを学ぶ。その結果、それを補完するために「極めて自己充足的な存在」としての自己に関する表象を形成し、これを脅かす情報はすべて cut off するという対処方略を組織化することになる。従って、自己に関する IWM を脅かすような行動 (この場合、拒否的な愛着対象への attachment 行動がこれにあたる) はすべて抑制され、それは愛着対象以外の対人

関係にも適用されることにより、他者と距離を置いた行動パターンが組織化されることになる。

また、Bowlby (1980) は IWM の機能に関しては次のように述べている。「我々が人生で出会う状況はすべて、我々のまわりの世界、及び我々自身について持っている代表的モデルによって解釈される。感覚器官を通して到達する情報は、それらのモデルによって選択し解釈され、我々にとって、そして我々が愛する人にとって、その情報が重要であるか否かはそのモデルに従って評価され、そして行為の計画はそのモデルを用いて考えられ実施される。更にそれぞれの状況をいかに解釈し評価するかは、我々がどう感じるかということにも関連する」(pp. 248-249)。このことは IWM が人間の認知・情動系をコントロールする情報処理システムとしての機能を果たしていることを意味するものと思われる。すなわち、IWM は環境や身体の情報を選択的に入力し、解釈、評価することによって種々の状況下において喚起される情動を制御し、安全感が得られるようその後の行動をガイドする機能を持つものと考えられるのである。

Bowlby の attachment 理論は、一般に乳幼児期における母親と子どもの間の関係性に言及する理論と捉えられているが、以上の IWM に関する議論を考慮すると、必ずしも彼が乳幼児期の母子関係にのみ限定して考えていたとは思われない。関係性の問題よりもむしろ、attachment 関係の中で何が個人に内在化され、それが生涯発達の中でどのように個人の認知や行動を特徴づけるかという点に理論の焦点があるように思われる。それは、Bowlby (1979) が、「愛着行動はそれこそゆりかごから墓場までの人間存在を特徴づける」(p. 183) と述べていることから明らかである。このように彼の attachment 理論は Personality 理論としての色彩が強く、その際に中心的役割を担うのは IWM に関する仮説である。これは、IWM に関する記述が Personality 形成やその障害に関わる章(例えば、Bowlby, 1973/1980)に多くみられ、しかもそこでの論議の理論的根拠となっていることから理解されよう。しかし、それだけに IWM に関わる記述は多義に渡っており、これを明確に定義づけるのは難しい。そこで、以下では様々な IWM に関する記述を整理し、概念の明確化を行ったうえで、現在までに行われてきた若干の研究を紹介する。そしてそれらをふまえたうえで今後の IWM 研究の方向性と問題点について考察して行くこととする。

2. 概念の整理

表1は Main, Kaplan & Cassidy (1985) によって挙げられた諸定義を基に作成したものである。いったいに心理学的概念を定義づけるためには、まず、その概念がどういう構造を持ち、それが人間の諸活動でのいずれの側面で機能し、どのような役割を果たすのか、更に、それはどのように形成され発達するのかなどの点が明らかにされねばならない。

表1 Internal Working Models の諸定義 (Main, et, al, 1985より作成)

定 義 内 容	構造	機能	発達
1. IWM は認知的要素だけでなく情緒的要素をも含む心的表象 (mental representation) である (Bretherton, 1985)。それは行動システムに必須の要素であり、行動のガイダンスに積極的な役割を演ずる (Bowlby, 1980)。	○	○	
2. IWM は一般化された出来事に関する表象 (event representation) から形成される (Bretherton, 1985)。			○
3. いったん形成された IWM は意識の外で働き、変化しにくい傾向にある (Bowlby, 1980)。			○
4. 自己に関する IWM を形成する出来事 (event) は、attachment に関連した出来事である。これらのモデルは養育者への接近を求めるという比較的環境に対して安定した傾性 (以前は“本能”と呼ばれていたもの) の“結果”から作られる。			○
5. 養育者に接近しようとする試みがいつも受け入れられていた乳児は、いつも妨げられていたあるいは気まぐれにしか受け入れてもらえなかった乳児とは違った関係性に関する IWM を発展させるだろう。接近することを常に制限されたり気まぐれにしか許されなかった場合には、注意や行動、情動表出の仕方に関して再び体制化し直したり制限したり、再び方向付けたりすることになる。			○
6. あるタイプの関係性に関する IWM は人生最初の1ヶ月間で形成される。1歳児におけるストレンジシチュエーションでの行動の個人差は乳児の親子関係に関する IWM の個人差を反映しているものと考えられる。			○
7. 関係性に関するモデルはパートナーがいるときに体験された出来事にのみ依存するわけではない。出来事に関する表象は、“試みることとその結果”を含んでいるので、養育者がいない時に、例えば養育者を得ようとする努力とその結果も IWM の構築に影響することになる。このように、関係性に関する IWM はパートナー不在の中でも変化しうる。			○
8. 関係性に関する IWM は行動を方向づけたり、体験がどう感じられたのかの評価を行うためのルール及びルールの体系を与えてくれる。		○	
9. 関係性に関する IWM はまた、注意や記憶を方向づけたり体制化するためのルールを提供してくれる。このルールは自己と attachment 対象、及び両者の関係性に関する知識へのアクセスを制御する。これらのルールは直接的、間接的に attachment に関連しているので思考や言語の体制化に反映される。多くの場合、意識化されていない。		○	
10. 子ども時代には、関係性に関する IWM は具体的な体験内での変化に応じて変わりうる。			○
11. 形式的操作の段階にはいると、以前に確立された特定の関係性に関する IWM は変化する可能性を持つ。これは思考それ自体に関して考えることができるようになるためである。つまり、与えられた関係性のシステムの外側に踏み出して、システムが機能しているのを見ることができるようになるということ (Piaget, 1967)。			○
12. IWM は非常に変化しにくい傾向を持つけれども鋳型のようなものとは考えられない。IWM は情報へのアクセスを制御するための構造化されたプロセスと考えるのが最も良い。	○		

この観点から表1の諸定義を見ていくと、まず IWM の構造については、1番と12番の定義に示されている。そこでは、IWM が愛着対象や自己に対する評価的要素だけでなく感情的要素も含んだ心的表象であること。しかもそれは鋳型のように固定化されたものではなく、変化しにくいけれどもその可能性のある構造化された情報処理過程であることが示されている。

また、IWM の機能・役割については1番と8番、9番の定義に示されている。先に、IWM が情報を選択的に入力し、解釈、評価することにより情動を制御し、行動のガイダンスを行うと述べたが、それ以外に IWM は個人の attachment に関する記憶の体制化や検索を特徴づけるためのルールとしても機能していることがわかる。結局、IWM の機能に関しては次のように定義することができよう。「IWM は attachment に関係のある情報を体制化し、attachment に関連した体験や感情、概念についての情報検索を制御するための意識的・無意識的なルールの集合体 (Main, et. al., 1985, pp. 66-67) であり、安全感が得られるように各種情報を処理することにより、ネガティブな情動喚起を制御し行動のガイダンスを行う」。

次は、IWM の形成過程及び発達についてである。残りの定義はすべてこの点について言及しているものである。まず、IWM がどのように形成されるかについて。小嶋 (1988) によれば、子どもが養育者に接近を求めたときに体験する出来事から、子どもは接近の仕方、求め方等、愛着対象との交流のやり取りに関する様々なスクリプトを形成する。このスクリプトの表象を event representation と言うが、初期の子どもの IWM はこれら event representation の一般化と理解しうる。このように、子どもの IWM は主たる養育者である母親との間で体験された出来事に依存するが、母親が不在の場面で子どもが母親を得ようと努力することやその結果もまた event representation に含まれるため、必ずしも母親と一緒にいる時の出来事にのみ依存するわけではないという。以上を考慮すると、strange-situation で子どもが母親に接近を求めるときのあり方は、1歳時点での子どもの IWM を反映していることになる。次に、IWM の発達過程についてみてゆく。IWM は意識下で働くために変化しにくい傾向にはあるが、児童期までは attachment に関連した具体的な出来事に応じて徐々に発達してゆく。青年期にはいると大きな転換期を向える。これは、11番の定義にもあるように、形式的操作の段階に入って自己や他者との関係性を客観視出来るようになるためであるが、更には恋愛を契機にして恋人という新たな愛着対象の登場により、IWM の再構成が求められるからである。

最後に、“working model” という用語のもつ意味について述べよう。Bretherton (1985) によれば、IWM の “working” という形容は心的表象の果たす役割のダイナミックな側面に注目するからである。人はこの表象を操作することによって、現在を解釈し、将来の行動について選択すべきコースを評価する。また “model” という言葉は “construction” を意味する。それゆえ、その発達は初期の単純なモデルからより複雑なモデルへと階層的に構造化することになる。子どもが情緒的、認知的に発達するに伴い、このモデルはより洗練されてゆく。しかし、いったん形成されたモデルは意識の外で働き、そして新しい情報は現存するモデルに同化されるために、モデル自体にダイナミックな変化は起こりにくい傾向にある。

このように、“working model” はまさにその個人特有の世界についての「作業モデル」(使用可能な模型)なのであって、人はこのモデルを用いて現実世界をシミュレートし、設定目標としての安全感が得られるように将来の行動プランを決定するのである。

3. 研究 紹 介

Bowlby が“attachment and loss”全3巻の中で IWM に関してくり返し論述しているにも関わらず、この概念が注目されるようになったのはここ数年のことである。これは、Ainsworth, Blehar, Waters & Walls (1978) によって strange-situation 法 (SSP) が開発され、その後この方法が attachment を測定するためのほとんど唯一の方法として全世界で採用されたことによるものと思われる。周知のように、SSP は母子の分離—再会場面での1歳児の attachment 行動を基にして母子間の attachment の質を測定するよう標準化されている。attachment 行動は、特に発達初期においては子どもの年齢に大きく影響されるために、SSP はせいぜい2歳児までの適用しか望めない。このため attachment 研究は乳幼児期に制限されることとなった。しかし、「これは愛着対象の研究がもつばら子どもについてののみ詳細に行われてきた事情によるのであって、言われていることは成人や誰であれその人にとって愛着対象である人にも適用できる」(Bowlby, 1979, p. 187) のである。IWM 研究が飛躍的に増加したのは、George, Kaplan & Main (1984) による成人の IWM を測定するための面接法 (AAI: Adult Attachment Interview) の開発と1985年の“Monographs of the Society for Research in Child Development”誌上での attachment 研究の特集以後のことである。この特集では、個人の attachment 機構 (attachment organization) の質を、ノンバーバル行動のパターンの違いから検討するだけでなく、表象や言語レベルでの違いにまで広げて研究することにより、研究対象を乳幼児期以後にも拡大している。そのために様々な attachment に関する測定法を開発して、従来の方法 (SSP) と比較することにより、その妥当性を検討している (例えば、Waters & Deane, 1985; Main, et. al., 1985 など)。

このように、IWM の概念を導入することにより、attachment 研究は新しい展開を示し始めているわけであるが、これらの研究はその目的から大きく3つに分けることができる。第1は、臨床心理学研究への導入を目的としたものである。ここでは、障害を持つ親と子の関係理解、及び改善のための治療的アプローチの一環として IWM に注目している (これらの研究に関しては、*Infant Mental Health Journal*, 1989, Vol. 10, No. 3 で “Internal representation and parent-infant relationships” と題した特集が組まれているので参照されたい)。第2は、発達心理学的研究への導入を目的としたものである。先に挙げた SRCD モノグラフの特集号において展開された諸研究や、その後 Main や Cassidy らによって行われた研究 (例えば、Main & Cassidy, 1988; Cassidy, 1988 など) がこれにあたる。ここでは、attachment 機構の発達の連続性を検討するために、乳幼児期以後の attachment と彼らの自己及び他者に関する表象との関連性に焦点が当てられている (なお、これらの研究については久保田, 1988 を参照)。第3は、認知もしくは社会心理学的研究への導入を目的としたものである。3つの中では研究例も少なく、また研究の焦点が青年期以後の IWM にあるため、他の研究のように母親と子どもの attachment に関して直接的な資料を求めておらず、若干その性質を異にしている。ここでは、もつばら対人関係上の IWM の認知的・情緒的機能の検討や成人の Personality との関連に焦点が当てられており、筆者の関心もここにある。以下、この立場からの IWM 研究について紹介して行く。

戸田 (1989) は情動喚起場面における対人情報処理のあり方が認知者の持つ IWM によって異なるという仮説を検証することで、IWM の認知的機能について考察している。被験者の IWM は、詫摩・戸田 (1988) により作成された尺度への回答を変量としたクラスター分析により3つのタイプに分類された (なお、この尺度は戸田, 1988 により改定されている)。各タイプはそれぞれ

下位尺度の内容 (secure / avoidant / ambivalent) をよく反映しており, secure 群, avoidant 群, ambivalent 群と名づけられた。secure 群は, “たいていの人は自分を好いてくれており, すぐに知合いができる。また, 気楽に人に頼ったり頼られたりすることができる” という心的表象を他の群よりも相対的に強く持つ者達である。avoidant 群は “人と親しくなったり, 親密な関係になることを嫌い, 他者を全面的には信用できない” という, ambivalent 群は “自分を信頼できなく, 本当に人から好かれているかについても自信がない。人といつも一緒にいたがるので疎ましく思われている” という他者と自己に関する表象を相対的に強く持つ者達である。これらの群に含まれる者達が, VTR に録画された初対面の人物 (刺激人物) の示す反応をどのように解釈し, その人物とのその後の相互交渉をどのように望むかが検討された。実験は, 「刺激人物の示す反応は被験者に向けられていると教示した場合」と「第三者に向けられたものと教示した場合」(2条件) × 「刺激人物が注視や微笑み, うなづきなどの好意的反応を示す条件」と「目そらしやしらかめつら, あくびなどの非好意的反応を示す条件」(2条件) × 被験者の IWM (3条件) の3要因の実験計画で, 60名の男子大学生を対象に行われた。その結果, 刺激人物の示す反応が自分に向かっていると教示された場合において特に IWM の違いが対人情報処理に強く関わっていることが示された。例えば, ambivalent な IWM が優位な者は, 自分に対する相手の反応により強く影響され相手からの好意や関心を極端に解釈する。そして, 好意的反応を示すものとは後の相互交渉を強く望み, そうでないものとは交渉を避ける傾向にある。一方, avoidant な IWM が優位な者は, 好意的反応を示す人物に対して好意を感じてはいるのだが, 相手からの好意や関心は低く評価しており, 相手の示す反応に関わらず相互交渉を避ける傾向がみられた。他者からの好意的・非好意的反応はポジティブあるいはネガティブな情動を喚起させる。他者からの情報が個人の “安全感 (felt security)” を脅かす種類のものと解釈・評価された場合, 喚起された情動を制御し, 安全感が得られるように情報処理が行われる。例えば, ambivalent にとって, ポジティブな情動は “安全感” を高め, 逆にネガティブな情動はこれを脅かすように作用する。もともと不安定な “安全感” を持つ ambivalent はこのため, ポジティブな情報を与えてくれる対象により近づくことによって, 自らの “安全感” を強めるよう行動プランを立てる。一方, avoidant にとっては, ポジティブな情動であろうとネガティブな情動であろうと, 強い情動喚起そのものが自らの “安全感” を脅かすように作用する。それゆえ, 例え相手に好意を持っても, 情動が喚起しないように, 相手からの情報はその種類如何に関わらず, 全て過小評価し, 相手から遠ざかることによって “安全感” を保つよう行動プランを立てるものと考察される。このように, IWM は個人が “安全感” を得られるように情報を解釈・評価し, 後の行動プランを立てるための認知的ルールとして機能しているものと思われるが, そのルールはその個人が子ども時代に両親との間で自らの distress をどのようなやり方で解消してきたかという感情制御 (affect regulation) のスタイルと関連している。

Kobak & Sceery (1988) は, IWM が情緒的な distress や状況に挑戦するときの個人の反応をガイドし, 感情制御のためのルールを提供してくれることを示すために, 53人の大学1年生を被験者として, IWM と感情制御のスタイルの関連性について検討している。被験者の IWM は, Adult Attachment Interview によって3種類のカテゴリー (Secure / Dismissing / Preoccupied) に分類された。これらは, SSP による secure, avoidant, ambivalent にそれぞれ対応している。また感情制御のスタイルは, 自我の弾力性 (ego-resiliency) や敵意の強さ, 不安の高さなどについての友人からの Q ソート法による評定で, 自己に関する表象は distress や社会的コンピテン

スについての、関係性に関する表象は孤独感や社会的サポートについての自己報告によって測定された。その結果、Secure（安定型）と分類された者は、attachment にまつわるエピソードを再生し易く、全般にポジティブな内容が多い。また、特に両親を理想化することもなく、ネガティブな側面も認めた上で、親子関係に関する記憶を一貫した内容に統合している。仲間からは自我の弾力性が高く、不安や敵意が低いと評価されており、自己評価でも現在に distress を感じておらず社会的に適応していると報告されている。自我の弾力性は社会的文脈内でのネガティブな感情を建設的に調整する能力と関連している。このグループの調整能力は、仲間から不安や敵意が低いと評価され、自らも現在に適応し、社会的にコンピテントであると報告していることから支持される。Dismissing（抑圧型）と分類された者は、attachment に関連した記憶を再生するのに困難が伴い、その内容には両親から愛されず拒否されていた等、ネガティブなものが多い。彼らは attachment 関係に価値を置かず、親の機能を過小評価している。仲間からは敵意が強く不安も高いと評価されているにも関わらず、自己評価では Secure 同様、現在に distress を感じておらず、社会的にコンピテントであると認知している。仲間からの評価と自己評価のくいちがいは、このグループに自らのネガティブな情動を認めない傾向があることを示すものであろう。両親から拒否されたことに対する怒りの感情は、両親との attachment 関係にとって脅威となる。それ故、仲間関係の中でその潜在的な怒りを表出することが、親子関係の間での葛藤を避け、短期的な適応価を持つことになる。しかし、仲間関係での敵意の表出は、満足度の低い、距離を置いた対人関係を導く。これは、このグループが学年末に最も孤独感を感じており、さらには家族を支持的対象と見なしていないことから支持される。Preoccupied（没頭型）と分類された者は、attachment に関する記憶の再生は良いのだが、両親を実際以上に理想化し、その関係に“没頭する（preoccupied）”傾向がみられる。このためネガティブな側面での記憶が曖昧で、一貫性に欠ける。彼らは仲間から3群の中で最も不安が高いと評価されており、自己評価でも現在に distress が強く生活に適応していない。彼らの感情制御はこの不安の強さに特徴がある。Dismissing のようにネガティブな情動を自ら認めないことで対処するのではなく、attachment 対象を理想化し、彼らに夢中になることでネガティブな情動を和らげるのであろう。

成人におけるこのような感情制御のスタイルは、乳幼児研究からの知見とよく一致する。乳幼児は母親を安全基地として活用することで distress に対処し、環境との効果的な相互作用を遂行する。大人においても、円滑な対人関係を営み、自らの能力を最大限に発揮するためには、その置かれている社会的文脈に合わせてネガティブな情動を適切に制御し、情緒的に安定していることが必要であろう。このような情緒的安定感を得るための情報処理システムとして IWM は機能している。そして、このシステムにおける認知的ルールの個人差は、その個人が過去に attachment 対象との間で用いてきたストラテジーの一般化として理解しうるのである。例えば、distress のシグナルに拒否的な母親との間では、attachment 対象に援助を期待するようなストラテジーを取ることはできず、ネガティブな情動を喚起する情報そのものを cut off することでしか安定感を得ることが出来ない。このような体験は、子どもに「拒否するもの」としての他者に対する表象を形成させ、他者の自分に対する好意や関心を過小評価し（戸田，1989）、距離を置いた対人関係（Kobak, et. al., 1988）を取らせることになる。一方、母親の対応が気まぐれで中途半端なものである場合には、子どもは母親からの援助が予測できないために、母親との関係性に強い不安感を持つことになる。この場合、子どもは母親に極端な依存やしがみつきの示したり、逆に強い怒りをぶつけたりすることによって結果的に母親の注意を引きつけ、母親との近接を維

持することにより安全感を得ようとするだろう。戸田や Kobak らの研究において考察された成人の感情制御のスタイルにもこれと同様のメカニズムが伺われる。

4. まとめと今後の展望

IWM 研究の最大の問題点は、おそらくは、乳幼児期の母子の attachment との関連性にあるものと思われる。特に、IWM の分類カテゴリーが乳幼児期の attachment pattern に対応しているため、乳幼児期の IWM があたかも「鋳型」のように固定化し、変わらないままの構造で青年期以後の IWM として機能しているかのような印象を与えやすい。しかし、これは明らかに誤りである。確かに、“一旦形成された IWM は、意識下で働き、新しい情報は現存するモデルに同化されるために、モデル自体にダイナミックな変化は起こりにくい傾向にある” (Bretherton, 1985) が、この形成過程についてはまだ明確な証拠はないのである。第2章でも述べたように、IWM は児童期までは attachment に関連した具体的な出来事 (event) に応じて変化する。更に、青年期に入ると形式的操作の能力が高まり、新しい attachment 対象の登場とも合い待って自己や関係性に関して客観視する機会が増え、IWM は大きく変更される可能性を有している。従って、青年期以降の IWM を考えるときには、単純に児童期までの IWM の連続線上にこれを位置づけるわけにはいかないのである。

Bowlby (1973) は IWM に関して3つの命題を掲げている。以下この命題に沿って上記の問題点について考察していく。

まず、最初の命題は、「望むときにはいつでも attachment 人物が近づいてきて応答してくれるという確信 (confidence) を持っている個人は、理由は何であっても、そのような確信を持たない個人に比べて、強い恐怖や慢性の恐怖に陥る傾向はかなり低いであろう」というものである。これは、安定した IWM を持つ者がそうでない者よりも社会適応がよく、distress に建設的に対応する能力に優れていることを示している。確かに、成人を対象にして、死に対する恐れと IWM との関連を検討した Mikulincer, Florian & Tolmacz (1990) の報告によれば、secure は潜在的にも顕在的にも死への恐怖感が少なく、逆に ambivalent はどちらのレベルでも恐怖感が強い。一方、avoidant は顕在的には secure 同様安定しているのだが、投影法 (TAT) に反映された潜在的な恐怖感は強いなど、IWM によって恐怖に陥る傾向が異なっていることが示されている。また、前述の Kobak らの研究でも、secure がネガティブな感情を建設的に調整する能力に優れていることが示されており、成人を対象とした研究ではこの命題は支持されている。一方で、乳幼児を対象とした研究でも、母親との間に secure な attachment を形成している子どもは、そうでない子どもに比べて、解決困難な事態でもさほどフラストレートすることなく、他者からの援助を積極的に活用し (Matas, Arend & Sroufe, 1978)、失敗を克服する自己信頼感に優れている (Lütkenhaus, Grossmann & Grossmann, 1985)、また、他者との相互交渉場面においても、より社会化された形で相互作用を営むことができる (Pastor, 1981; Waters, Wippman & Sroufe, 1979; Lieberman, 1977) 等の報告が成されており、乳幼児研究でもこの命題は支持されている。しかし、乳幼児の IWM は行動レベルで、成人の IWM は言語もしくは表象レベルで測定されたものであって、結果が似ているからといって単純に両者を同質のものとは見なすわけにはいかない。この意味でも IWM の測定法間の内容的妥当性の検討が成されなければならない。

第2の命題は、「このような確信、あるいは確信の欠如は乳幼児期、児童期及び思春期という未成熟な時期に徐々に形成され、この時期に発達する期待は、例えばどのような期待であっても、

その後一生を通して比較的变化することなく持続する傾向がある」というものである。これは、IWMの形成過程及びその発達の連続性に関するものである。対象関係論の立場にいる精神分析家達は、Personalityが生後数カ月からほぼ1～2年で形成されるという立場を取るが、Bowlbyは必ずしも乳幼児期をPersonality発達の臨界期とは考えていない。むしろ、子どもが母親を特別な対象として弁別することでattachment行動が最も促進される時期としての6ヶ月～5歳前後をIWM形成の最も敏感な時期と考えてはいるが、このような敏感性は次第に減少しながらも、少なくとも15歳までは持続すると述べている。すなわち、初期のattachment関係の中で形成されたIWMは、後のattachmentに関連した様々な出来事をそのモデルの中に同化し、あるいはモデルを調整することで、より複雑な認知構造へと発達して行くものと考えられ、その意味でのPersonality構造の可塑性は認めているのである。現在までのところ、このようなIWMの発達のプロセスに関する系統的な研究は行われていない。これは各年段階におけるIWMの測定方法が決定していないこともその一因として挙げられる。IWMの測定方法としては、AinsworthらのSSP以外には先に挙げたGeorgeらのAAIが主に用いられているが、両者の関連性についてはまだはっきりした結論は出されておらず、前述のMainらによって、6歳児用のSSPの開発と共にようやく検討され始めた段階である。それ以外にも、質問紙法による測定尺度の構成(戸田, 1988; Mikulincer, et. al., 1990; Collins & Read, 1990)や投影法(CAT)を用いた評定方法(久保田, 1990)の開発なども行われており、これらの測定法が整うに従い、今後様々な発達段階でのIWMの様相が明らかになっていくものと思われる。

第3の命題は、「未成熟な時期に発達する各個人の様々な期待は、その個人の実際の諸経験をかなり正確に反映している」というものである。これは、IWM形成に対する実際の経験の役割について言及するものである。Bowlby自身は、子ども時代の経験が演ずる役割の重要性をかなり強調している。また実際に、子ども時代の親子関係や夫婦関係の質、親との分離体験が青年のIWMに強く影響することを報告している研究もある(例えば、Hazan & Shaver, 1987; Mikulincer, et. al., 1990; Feeny & Noller, 1990など)。しかし、これらの研究はいずれもretrospectiveな方法によって得られた結果であるため、必ずしも過去の実際の体験が正確に反映されているとは限らない。というのも、Grossmann, Fremmer-Bombik, Rudolph & Grossmann (1988)やKobakら(1988)の報告に見られるように、過去のattachmentに関する記憶の体制化や再生のあり方はその個人の持つIWMに強く影響されているからである。また、子どもの性格や行動が実際の客観的な環境よりも、親との関係をどのように認知しているかという主観的な環境により強く影響されていることも指摘されており(例えば、小嶋, 1970; 森下, 1981など)、一概に過去の諸経験からのみ論議するわけにはいかない。IWMの形成には、過去の実際の体験と主観的に意味づけられた体験が相互作用的に影響しているものと予想される。今後は、記憶の体制化の問題がIWMとの関連で検討されなければならない。

これまで、IWMに関する自己と他者の表象が個人の中に、ただ1種類しか存在していないかのような記述を行ってきたが、これはIWMの概念を明確にするためであって、筆者は必ずしもそのようには考えていない。むしろ、個人は様々な内容の自己と他者に関する表象を持っており、それら共存する表象の内のどの表象がその個人においてドミナントであるか、あるいは各表象がどのように結合し、ひとつの全体として機能するかによって、個人のIWMは決定されると考えている。例えば、ambivalentなIWMというのは、「やさしい母親」と「冷たい母親」という相

反する表象が同じ勢力で同一個人の中に存在し、それが結果として ambivalent の不安定な“安全感”と作り上げているといったように。

いずれにしても、現在 attachment 研究は従来の Ainsworth 流の母子研究を越えて、大きな転換期を迎えている。attachment を行動レベルからだけでなく、表象や言語レベルからも検討して行くことは、attachment を乳幼児期から切り離し、Bowlby が指摘してきたように全生涯に渡る Personality の発達理論として attachment 理論を捉え直す契機となろう。この意味で、IWM 研究は attachment 研究に新たな方向性と発展の可能性を与えうるものと言えよう。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of Attachment*. Hillsdale, N. J.: Erlbaum.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss: Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books. (黒田実郎他訳 母子関係の理論Ⅰ 愛着行動 岩崎学術出版社 1976)
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss: Vol. 2. Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books. (黒田実郎他訳 母子関係の理論Ⅱ 分離不安 岩崎学術出版社 1977)
- Bowlby, J. (1979). *The making and breaking of affectional bonds*. London: Tavistock. (作田 勉監訳 ポウルビィ母子関係入門 星和書店 1981)
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and loss: Vol. 3. Loss: Sadness and Depression*. New York: Basic Books. (黒田実郎他訳 母子関係の理論Ⅲ 愛情喪失 岩崎学術出版社 1981)
- Bretherton, I. (1985). *Attachment theory: Retrospect and prospect*. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points of attachment theory and research*. Monographs of the Society for Research in Child Development, 50 (1-2, Serial No. 209), 3-35.
- Cassidy, J. (1988). *Child-Mother Attachment and the Self in Six-year-olds*. *Child Development*, 59, 121-134.
- Collins, N. L. & Read, S. J. (1990). *Adult Attachment, Working Models, and Relationship Quality in Dating Couples*. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 4, 644-663.
- Feeney, J. A., & Noller, P. (1990). *Attachment Style as a Predictor of Adult Romantic Relationships*. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 2, 281-291.
- George, C., Kaplan, N., & Main, M. (1984). *Adult Attachment interview*. Unpublished manuscript, University of California, Berkeley.
- Grossmann, K., Fremmer-Bombik, E., Rudolph, J. & Grossmann, K. E. (1988). *Maternal attachment representations as related to patterns of infant-mother attachment and maternal care during the first year*. In R. A. Hinde & J. Stevenson-Hinde (Eds.), *Relationship within Families: Mutual Influences*. Clarendon Press, Oxford. 241-260.
- Hazan, C. & Shaver, P. (1987). *Romantic Love Conceptualized as an Attachment Process*. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 3, 511-524.
- 小嶋秀夫 (1970) 親子関係の理解 (二) 児童心理, 24, 1912-1929.
- 小嶋謙四郎 (1988) アタッチメント研究の動向 乳児発達研究-10周年記念号, 第10号, 1-7, 乳児発達研究会.

- Kobak, R. R. & Sceery, A. (1988). Attachment in Late Adolescence : Working Models, Affect Regulation, and Representations of Self and Others. *Child Development*, 59, 135-146.
- 久保田まり (1988) 最近の母-子関係理論の動向 早稲田大学大学院文学研究科紀要 別冊第15集 哲学・史学編, 43-54.
- 久保田まり (1990) 投映法による幼児のセルフ, 母子関係, 対処行動の検討 日本心理学会第54回大会発表論文集
- Lieberman, A. F. (1977). Preschoolers' Competence with a Peer : Relations with Attachment and Peer Experience. *Child Development*, 48, 1277-1287.
- Lütkenhaus, P., Grossmann, K. E., & Grossmann, K. (1985). Infant-Mother Attachment at Twelve Months and Style of Interaction with a Stranger at the Age of Three Years. *Child Development*, 56, 1538-1542.
- Main, M. & Cassidy, J. (1988). Categories of Response with the Parent at Age 6 : Predictable From Infant Attachment Classifications and Stable Over a 1-Month Period. *Developmental Psychology*, 24, 3, 415-426.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. (1985). Security in infancy, childhood, and adulthood : A move to the level of representation. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points of attachment theory and research*. Monographs of the Society for Research in Child Development, 50 (1-2, Serial No. 209), 66-104.
- Matas, L., Arend, R. A., & Sroufe, L. A. (1978). Continuity of Adaptation in the Second Year : The Relationship between Quality of Attachment and Later Competence. *Child Development*, 49, 547-556.
- Mikulincer, M., Florian, V., & Tolmacz, R. (1990). Attachment Styles and Fear of Personal Death : A Case Study of Affect Regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 273-280.
- 森下正康 (1981) 養育態度の認知差と子どもの性格に関する発達の研究 和歌山大学教育学部紀要 (教育科学), 30, 43-55.
- Pastor, D. L. (1981). The Quality of Mother-Infant Attachment and Its Relationship to Toddlers' Initial Sociability with Peers. *Developmental Psychology*, 17, 3, 326-335.
- 詫摩武俊・戸田弘二 (1988) 愛着理論からみた青年の対人態度 —— 成人版愛着スタイル尺度の試み —— 東京都立大学人文学報第196号, 1-16.
- 戸田弘二 (1988) 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル —— 作業仮説 (working models) からの検討 —— 日本心理学会第52回大会発表論文集
- 戸田弘二 (1989) 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル(2) —— 対人認知場面における情報処理の違い —— 日本教育心理学会第31回総会発表論文集
- Waters, E., & Deane, K. E. (1985). Defining and assessing individual differences in attachment relationships : Q-methodology and the organization of behavior in infancy and early childhood. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points of attachment theory and research*. Monographs of the Society for Research in Child Development, 50 (1-2, Serial No. 209), 41-65.
- Waters, E., Wippman, J., & Sroufe, L. A. (1979). Attachment, Positive Affect, and Competence in the Peer Group : Two Studies in Construct Validation. *Child Development*, 50, 821-829.